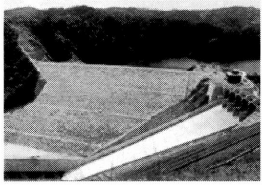
安高生と呼ばれた頃

平田勝也
（七十六期）

昭和三五年、当時は特別の目的もなく漫然と皆が行くから僕も行く程度の気持ちで、殆んど競争もない受験で入学しましたが、門をくぐるとそこは競争社会でした。毎回張り出される成績順位表に一喜一憂する世界に放り出された気分が致しました。

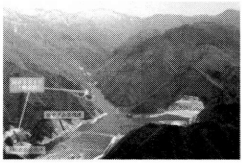
いわゆる灰色の青春ではありましたが、それなりに学内の出来事があり、当時安保闘争の最中で、時代の大きな変革期だと授業の合間に歴史の先生が熱く語ったり、学校祭で静々と本校から郡山駅前まで行進しました。授業中ふと外を見ると、サッカー授業で濛々と砂塵を上げる生徒達がおりました。修学旅行は貸切客車で荷棚に寝る生徒もいて、特に清水寺や二見ヶ浦の印象が強く残っております。因みに、国語・歴史・音楽教科は勉強というよりも、楽しみながら授業を受けた記憶があります。昼休みを待たず、皆と購買部で揚げパンなどを買った記憶もあります。



大柿ダム

現安積歴史博物館の旧校舎は天井が高く重厚な木造建築ではありますが、うす暗く冬は寒い教室で、新校舎の方が明るく黒板が見易いように感じました。

在学中は何となく公務員や公共事業の責任者となって国民に貢献する道を選ぶべきだと考えていましたが、大学は資源工学科応用地質学講座に属して建設コンサルタントに入社し、爾来特にダム関係を主体に殆んどの分野の公共事業に従事して内外の地質調査業務を手掛けました。九州から北海道まで転勤を繰り返し、東南アジア建設事情視察旅行、世界大ダム会議出席の一環でオーストラリア・ニュージーランドの現地諸ダム等視察、ヨーロッパの歴史的な原初ダムや有名な事故ダムの視察、インドネシア・フィリピンの流れ込み発電・農業ダムの立地ＦＳなどの業務も経験しました。ダム関連では、主任技術者として七つの大ダムの初期段階から竣工に至るまで主任技術者として従事しました。（代表三ダム写真）このように、在校中に漠然と考えていた夢は必ずしも実現しておりませんが、それの一部分はやや達成したのかなと思っております。



日中ダム

荒砥沢ダム

現在、世界は大きな困難に直面し、日本の敗戦後、世紀の大変革期の最中にあります。この間、日本は高度成長期を経て失われた三〇年の長い停滞期を苦しんでおり、暗中模索で未来の姿を探っております。

このような時代にあって安積に学んだ意義を考えると、粗削りではあるが果敢なる未知の分野への挑戦、歴史的な時代に貢献した諸先輩の存在、故郷郡山市に由来する自由闊達な進取の気風、豊かな自然環境等々、優れた環境下にあると思います。安高は、二〇〇一年には共学制に変わり、バンカラのみでなく　新しい伝統が築かれつつあり、また近々中高一貫校となるそうで、更に新しい歴史が加わりそうです。

私が後進に望むのは、時流に流される安易な流行を追うことなく、先輩方の残した謂ゆる安積魂をバネにして、己を凝視し、本当にやりたい道を探し、考え抜いた世界観を持ち、身近に地球規模の思考・行動を起し、大袈裟には宇宙を見据えて進路を探って欲しいと思います。

このまま世界を放置すると、人口の果てしない膨張・資源の浪費・環境悪化・戦争続発により、人類の永続が難しくなるかもしれません。遠い未来に、かつて人類と呼ばれる生き物がいたと言われないようにしたいものです。

宇宙と生命
（白ハナミズキ）